

2拍前項をもつ明治期村名の連濁と非連濁に關与する
諸条件について：
現代の地名への変遷までを視野に入れて

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2018-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 城岡, 啓二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024552

2拍前項をもつ明治期村名の 連濁と非連濁に關与する諸条件について —現代の地名への変遷までを視野に入れて—

城 岡 啓 二

0. 筆者のこれまでの連濁研究と本稿の内容

筆者は、これまで地名や河川名を中心に連濁・非連濁の傾向や変遷を扱った4本の論文(城岡2014a、2014b、2015、2017)を書いている。最後の論文(城岡2017)では、内務省地理局編の『地名索引』(1885)にまとめられた明治期の村名のうち、前項が3拍のもの(の主なものを調査して、長い前項をとる場合の連濁・非連濁の傾向について現代の地名の連濁率の著しい上昇などの変遷とともに論じた。しかし、日本の地名でもっとも多いのは前項が2拍の地名複合語であり、3拍前項の結果もこれとの比較で理解すべきであり、日本の地名の連濁・非連濁について述べようとするなら、2拍前項の調査が必要不可欠である。城岡(2017:110)で「本稿で2拍前項について述べているところは、一部のサンプルを調べた程度なので、地名複合語の最多数派の2拍の前項を詳細に調査すれば別の傾向を示す場合もあるかもしれない」と述べたが、本稿は、この、これまでの拙論の不足・不備に応じるために行った調査をまとめたものである。

1. 調査対象

3拍前項の調査では『地名索引』に掲載されている主な前項要素をすべてとりあげ、後項についても連濁可能後項(つまり後項先頭拍がカ行清音、サ行清音、タ行清音、ハ行清音の後項)で特殊なもの以外はすべて調査した。それは存在自体が少ない3拍前項だから、調査対象の項目数を少しでも大きくするためにそういう方針をとったが、今回は、『地名索引』(1885)¹に掲載された2拍の

¹ 雄松堂版(1967)名著出版版(1973)、ゆまに書房版(1985)の3種の復刻版を利用して、できるだけ正確を期した。今回の地名調査の際にゆまに書房版には編集ミス(の落丁や乱丁)があることも判明したので、他の復刻版での調査を基本とした。

前項をとる村名のうち、組み合わせる後項要素を限定することで後項要素の違いによる連濁傾向の違いをできるだけ排除するようにした。調査対象の1拍後項要素は「木(キ)」、「田(タ)」、「津(ツ)」、「戸(ト)」の4つ、2拍後項は「川(カワ)」、「方(カタ)」、「坂(サカ)」、「崎(サキ)」、「島(シマ)」、「谷(タニ)」、「塚(ツカ)」、「橋(ハシ)」、「畑(ハタ)」の9つとした。1拍の後項要素としてサ行のものも加えたかったが、「瀬(セ)」や「須(ス)」は比較的一般的に多用される後項要素であるが、非連濁傾向が強く、連濁傾向の違いを見る調査には向いておらず、他に適当なものはなく、サ行の1拍の後項要素は調査対象に入っていない。

一方、前項要素については、和語のものを中心に調査したが、地名において、広く使われていて、和語のように多くの組み合わせの存在する「徳(トク)」と「福(フク)」は加える予定だったが、「福」については、『地名索引』の記載内容に疑義があるため断念した²。また「菊」も本来は漢語だが、漢語という意識さえなくなっていると思われるので、調査前項に含めた。

2. 調査結果

[表1]に調査結果全体の基本データをまとめているが、292種の2拍の前項要素

[表1] 調査村名の基本データ

調査前項	連濁総数	非連濁総数	村名合計	連濁率
292	1,557	3,100	4,657	33.4%

をもつ4,657か村の連濁・非連濁を調査して、全体の連濁率は、33.4%だった。城岡(2017)で調査した116種の3拍前項をもつ572か村の連濁率は36.4%だったので、3拍の前項も2拍の前項も明治期村名の連濁率はほとんど変わらなかったようである。したがって、長い前項が極めて強い連濁傾向をもっていると考えられる現代日本語の傾向を明治期の村名はもっていなかったことになると思われる。なお、現代の郵便番号簿の地名³では、3拍前項をとる地名複合語の連

²「福田村」にフクタの項目がなく、フクダが2項目に分かれて記載されている。同一発音が2項目に分かれる編集ミスは『地名索引』ではそれなりに見つかるが、「福田」の場合は、かなりの村名が該当すること、単純にどちらかがフクタであると判断する根拠もなかった。現代でもフクタと発音する地名がかなり存在することから、両方がフクダと判定するのも無理がありそうであり、調査項目に含めないことにした。

³本稿では、とくに断らない場合は、城岡(2017)同様に2017年2月28日更新の郵便番号簿の地名をもとに調査している。日本郵便がインターネット上で提供しているもので、Windowsのコマンドプロンプトとcgrepを利用して、様々な検索をしている。正規表現を使った検索、都道府県

濁率は現在までの間に大幅に上昇しており、頻度の高い8つの前項要素（ヤナギ、マガリ、イズミ、カシワ、ウルシ、ウシロ、サクラ、ハヤシ）の調査では、連濁率が36%から77%まで上がっていた。2拍の前項ではそこまで大幅な連濁率の上昇はないと思われるが、今回は現代地名での連濁率の上昇の程度は調査していない。

2.1 各後項要素の連濁傾向の違い

[表2] 調査後項別の連濁率（連濁率の高い順）

調査後項	行別拍数	連濁計	非連濁計	連濁率
田（タ）	タ行1拍	844	812	51.0%
戸（ト）	タ行1拍	53	93	36.3%
津（ツ）	タ行1拍	69	131	34.5%
塚（ツカ）	タ行2拍	60	152	28.3%
方（カタ）	カ行2拍	31	81	27.7%
谷（タニ）	タ行2拍	100	275	26.7%
島（シマ）	サ行2拍	107	317	25.2%
木（キ）	カ行1拍	74	232	24.2%
橋（ハシ）	ハ行2拍	29	93	23.8%
崎（サキ）	サ行2拍	80	287	21.8%
畑（ハタ）	ハ行2拍	21	76	21.6%
川（カワ）	カ行2拍	93	511	15.4%
坂（サカ）	サ行2拍	9	94	8.7%

今回の調査の主な関心は明治期の村名の地名複合語の前項の音韻や意味の条件による連濁抑制条件や連濁促進条件について（2.2）と、前項末と後項先頭の音の組み合わせによる連濁促進条件であるが（2.3）、後項要素単独でも連濁しやすさはかなり変わる

ようである。[表2]は、今回の調査で利用した各後項要素の連濁率をまとめたものである。連濁・非連濁の傾向が極端な後項要素と判断した要素は調査対象から除外してあるが、結果を見ると、連濁しやすい後項要素から連濁しにくい後項要素までかなり差があり、前項の連濁抑制条件や連濁促進条件などを明らかにするだけでは連濁と非連濁の現象全体の解明にならないことが示されている。後項単独でも連濁傾向の大きな違いがあるのだから、音韻や意味の面の規則性が後項要素にも潜在している可能性があるだろう。[表2]で連濁率がとくに高いのは「田」で、「田」を含め先頭音がタ行で1拍の後項の連濁率が高く、連濁率が8.7%の「坂」や15.4%の「川」⁴はとくに低いようである。連濁率が下位の後項は、最下位から見ていくと、「坂（サカ）」、「川（カワ）」、「畑（ハタ）」、

名と市町村名を除外した検索、条件を複合させたAND検索、検索結果から特定の項目を除外する除外検索、cgrepを利用することでこれらの検索が可能になる。

⁴「川」は現代の地名では連濁傾向を強め、現代の河川名の場合はさらに強い連濁傾向を持つようになっていると考えられる。

「崎(サキ)」、「橋(ハシ)」、「木(キ)」、「島(シマ)」へと続き、カ行のカワとキも混じるが、摩擦音という共通の特徴のあるサ行とハ行で始まる後項が多いことに気付く。し

【表3】 後項の行別連濁率(連濁率の高い順)

後項の先頭行	連濁計	非連濁計	連濁率
タ行	1,126	1,463	43.5%
ハ行	50	169	22.8%
サ行	196	698	21.9%
カ行	198	824	19.4%

かし、後項の行別に連濁率を集計してみると(〔表3〕)、サ行とハ行で始まる後項だけが著しく連濁率が低いということにはならず、タ行だけが連濁率が高く、カ行、サ行、ハ行の連濁率は、ほぼ同様ということになるようだ。

調査項目に含めなかった後項要素についても述べておく。「瀬(セ)」、「須(ス)」、「浜(ハマ)」、「姫(ヒメ)」などは非連濁傾向がかなり強く、「垣(カキ)」は逆にかなり強い連濁傾向を持っている⁵と考えられる。「沢(サワ)」や「口(クチ)」は明治期から現代までのあいだに連濁傾向をかなり強めていて、現在の地名では連濁することが多い。しかし、どんな後項要素が連濁しやすく、しにくいのか、現在のところ、正確に予想するのは容易ではないだろう。

前項による条件だけで地名複合語の連濁や非連濁という現象が説明しきれないということを具体例で確認しておく、城岡(2014a:177-179)に書いたとおり、地名(や姓)で「黒田」が連濁することが多いからといって、「黒」が複合語を連濁させやすい前項ということにはならないし、連濁・非連濁に関与する前項の条件もクロダで否定されるわけではない。〔表4〕は、「黒(クロ)」を村名の前項とするものの連濁数と非連濁数である。

サ行では連濁する例がまったくなく、カ行でも15.6%と低い連濁率である。タ行1拍の「田」と「津」の組み合わせでは連濁数が非連濁数より多くなっていて、とくに「田」の場合が著しい。「田」が比較的連濁しやすいとしても、これだけクロダが多くなったのは、言語外の何らかの事情が反映した可能性があると思われるが、クロ以外の多くの前項要素で村名の連濁・非連濁を観察すれば、そのような例外は捨象できるはずであり、形容詞の語幹や2拍めのラ行拍

⁵ 後項の「垣」が前項末の濁音(強い連濁抑制傾向の)以外で非連濁になるものを郵便番号簿で探すと、連濁抑制傾向がある前項末がラ行音や狭母音のもので、しかも石川県、福岡県、沖縄県にしか分布しておらず、他の「~垣」はすべて連濁している(① 石川県羽咋郡志賀町倉垣(クラカキ) ② 福岡県久留米市田主丸町石垣(タヌシマルマチイシカキ) ③ 福岡県大川市上白垣(カミシラカキ/下白垣(シモシラカキ) ④ 福岡県三潁郡大木町上白垣(カミシラカキ) ⑤ 沖縄県糸満市新垣(アラカキ) ⑥ 沖縄県国頭郡恩納村瀬良垣(セラカキ) ⑦ 沖縄県中頭郡中城村新垣(アラカキ))。

【表4】「クロ（黒）」を前項とする明治期村名の連濁・非連濁の調査結果

カ行連濁		タ行連濁		タ行連濁		タ行連濁		カ行連濁		カ行連濁	
木（キ）		田（タ）		津（ツ）		戸（ト）		川（カワ）		方（カタ）	
連濁数	非連濁数	連濁数	非連濁数	連濁数	非連濁数	連濁数	非連濁数	連濁数	非連濁数	連濁数	非連濁数
3	8	29	5	2	1	0	1	4	30	0	0
サ行連濁		サ行連濁		サ行連濁		タ行連濁		タ行連濁		ハ行連濁	
坂（サカ）		崎（サキ）		島（シマ）		谷（タニ）		塚（ツカ）		橋（ハシ）	
連濁数	非連濁数	連濁数	非連濁数	連濁数	非連濁数	連濁数	非連濁数	連濁数	非連濁数	連濁数	非連濁数
0	5	0	11	0	3	0	4	0	0	0	0
ハ行連濁		合計連濁率		カ行の連濁率		サ行の連濁率		タ行の連濁率		ハ行の連濁率	
畑（ハタ）		35.8%		15.6%		0.0%		73.8%		-	
連濁数	非連濁数										
0	0										

の連濁を抑制する傾向が強いことは、クロでは分かりにくくなっている面もあるが、2.2で後述する調査結果から結論できるというのが筆者の考えである。

2.2 前項の諸条件による連濁率の違い

村名の連濁に関与するような音韻条件を調べ、連濁率の低い順に並べたのが、【表5】である。連濁に関与する音韻条件は、連濁を抑制する条件と促進する条件の二つになるが、先行研究で検討されたものや、城岡（2017）の3拍前項の調査結果などに基づく。分かりにくい条件について説明しておく、「引き音

【表5】前項の音韻条件と連濁率（連濁率の低い順）

前項の音韻条件	調査前項数	連濁数	非連濁数	連濁率	
2拍めが濁音	40	19	365	4.9%	連濁を抑制
2拍めがラ行狭母音	23	32	215	13.0%	
2拍めが引き音（/R/）	6	78	352	18.1%	
2拍めがラ行音	39	153	568	21.2%	
2拍めがワ音（/wa/）	8	41	143	22.3%	
無声子音が欠如	56	332	995	25.0%	
2拍めがヤ行音	6	49	96	33.8%	連濁を促進
2拍めが母音単独拍	21	103	181	36.3%	
2拍めが狭母音	118	498	874	36.3%	
2拍めがタ行清音	35	139	239	36.8%	
2拍めがカ行清音	38	304	470	39.3%	
2拍連続無声子音	55	252	375	40.2%	
2拍めがマ行音	29	233	283	45.2%	
2拍めがナ行音	20	99	106	48.3%	
2拍めがサ行清音	49	336	290	53.7%	

(/R/)」は、独自の音素として分類したので、「2拍めが母音単独拍」には分類していない。「2拍連続無声子音」では、1拍めと2拍めの先頭に無声子音素が使われているものを分類したので、カキやカサヤツチやシカなどをこれに分類している。

結果を見ると、連濁促進効果をもつ前項の音韻条件としては、弱い順に2拍めがカ行清音、2拍連続無声子音、2拍めがマ行音、2拍めがナ行音、2拍めがサ行清音の5つということになる。一方、連濁を抑制する音韻条件の方は、弱い順からあげると、無声子音が欠如、2拍めがワ音 (/wa/)、2拍めがラ行音、2拍めが引き音 (/R/)、2拍めがラ行狭母音、2拍めが濁音の6つになる。2拍めがワ音 (/wa/) の場合に連濁が抑制されることは、城岡 (2017) で3拍の前項のカシワが明治期村名では非連濁傾向があったこととの関連で触れているが、2拍の前項の場合は、8種の前項要素の平均連濁率が22.3%と、中程度に連濁を抑制しているようである。よく使われる前項要素に「岩 (イワ)」と「川 (カワ)」と「澤 (サワ)」があるが(付録2 参照)、「岩 (イワ)」は他の2者に比べて連濁率がかなり低い。「岩 (イワ)」の連濁率が10.6%で極めて低いのは、2拍めのワ音に加えて前項全体に無声子音が含まれていないという音韻条件が加わっているためと説明できるだろう。2拍めがラ行音の場合でも中程度に連濁を抑制するが、ラ行狭母音なら、かなり強く連濁を抑制するという結果になっているが、ラ行狭母音の連濁抑制効果については、城岡 (2017) で確認した3拍前項と共通の性質である。

もっとも強く連濁を抑制する地名複合語前項の音韻条件は2拍めの濁音であるが、これは一般語彙では確認できなくなっている音韻条件である。城岡 (2014) で述べたように河川名では廃れつつある連濁抑制条件で、連濁しない安倍川や富士川が例外的な存在になりつつある。しかし、明治期の村名の調査では、濁音後にまれに連濁する村名があったとしても、それが複数見つかるということにはなかった。たとえば、長塚村では、ナガツカが5村で、ナガヅカが1村で、菅谷村では、スガタニが4村、スガダニが1村である。藤塚村もフジツカが1村で、フジツカが5村だった。

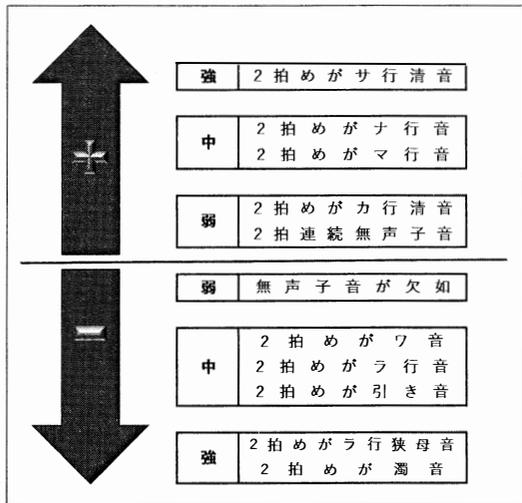
無声子音が連続したり、2拍めが無声子音で終わる前項は、声帯が連続稼働でないので、「疲労」⁶しておらず、連濁で声帯をあらたに稼働させることに余裕で対応できる点に連濁促進効果の理由を求めることができるだろう。2拍めが

⁶ このような言い方で説明しやすいと思うが、術語として声帯の「疲労」や「長時間労働」があるわけではない。

マ行音については、バ行子音とマ行子音は調音位置が同一の両唇音でサミシーとサビシーが入れ替わるように、準濁音としての性質があるかと思い、調べたものである。城岡（2017）でも、3拍前項で調べて、濁音に準ずる連濁抑制傾向があるか調べたが、はっきりしなかった。2拍前項の今回の調査では、連濁を抑制するどころか、2拍めがマ行音は、連濁率が45.2%で、連濁を促進する傾向が出ている。2拍めがナ行音の場合も連濁率が48.3%で、さらに強く、連濁を促進する傾向が出ており、マ行音の結果と同様であった。この二つの場合は音韻としても有声の鼻音という共通点があるので、それも考えると、音韻同化作用が起きて、後項先頭の無声子音を有声に変えようとする力が働き、連濁を促進するという説明が可能だろう。有声の鼻音で音韻同化作用が起きて、濁音の場合にはこの音韻同化作用が起きずに連濁を抑制するというのは、日本語の独自の規則性なのであろう。連濁を抑制する音韻条件の方を概観してみると、2拍めに無声子音が含まれないという条件が共通していることが分かる。声帯の連続稼働を回避する傾向との関連で説明できそうである。声帯の「長時間労働」を避ける目的で連濁が抑制されるという解釈である。なお、連濁促進効果をもっとも強かった2拍めがサ行清音の前項については、声帯の連続稼働の関連で説明することもできないし、音韻同化でも説明できず、筆者の知見では、仮説としての理由も推定することができなかった。

〔図1〕は、〔表5〕の結果から、2拍前項の連濁率の平均33.4%に近い結果だった「2拍めがヤ行音」、「2拍めがタ行清音」、「2拍めが母音単独拍」には連濁を抑制する効果も促進する効果もないとして除外して、残りの音韻条件を連濁促進効果を持つものと連濁抑制効果をもつものに分け、図式化したものである。

さて、現代の地名（や姓）でも「中田」にナカタの発音が残り、「中沢」にナカサワとナカザワの両方がある。2拍



〔図1〕 前項の音韻条件による連濁促進効果と連濁抑制効果

【表6】 前項の2母音が同一の場合の連濁率

前項の2母音が同一母音	調査前項数	連濁数	非連濁数	連濁率
同一母音が /a/	75	510	1,033	33.1%
同一母音が /i/	13	119	154	43.6%
同一母音が /u/	6	12	61	16.4%
同一母音が /o/	14	47	106	30.7%

の前項の二つの母音が同一のときに連濁を抑制するのではないかと考えて調査したが、[表6]の結果からはそういう傾向にはならなかった⁷。なお、引き音 (/R/) は独自の

音素として計算したので、例えば「遠(トー)」は前項の2母音が同一として計算していない。それから、[表6]に「同一母音が /e/」の欄がないのは、そのような前項要素がなかったからだ。日本語ではもともと /e/ の頻度が低く、自由には使われていない。結果を見ると、使用例は少ないが、狭母音のときの結果が特殊で /i/ なら連濁が強まり、/u/ なら連濁が抑制されるという結果になっているが、そのような規則性があるものなのか、あるいは、直接は、無関係で、別の条件から間接的に来ている結果の可能性もある。「古(フル)」なら、「形容詞語幹」と「ラ行狭母音」が重なっていて、/u/ の重複自体に意味はない可能性があるということである。連濁率が0%の前項の中には「荒」や「永」があるが、これらは、形容詞の語幹と考えることができる。

形容詞の語幹を前項とする村名全体の連濁率を出したのが[表7]である。17.2%の連濁率でこれより

【表7】 形容詞の語幹の連濁率

前項が	調査前項数	連濁数	非連濁数	連濁率
形容詞の語幹	26	122	587	17.2%

も低い連濁率は、[図1]にまとめた音韻条件では、濁音とラ行狭母音の二つしかなく、中程度の連濁抑制傾向がある。よく使われる前項要素について、個々に連濁率を調べたのが[表8]である。形容詞の語幹で連濁率の低いものから高いものを眺めて見ると、タカ、アカ、フカが高めで、2拍めがカ行清音で終わっている。2拍めがカ行清音というのは、[図1]で想定した弱い連濁促進傾向をもつ音韻条件である。タカとフカは、さらに、2拍連続無声子音でもある。もっとも連濁率の高かったクロについては、2.1の[表4]の説明ですでに述べたようにクロダの影響を受けているが、クロも無声子音を含んだ前項要素である。一方、連濁率が低い方は、無声子音をまったく含まないか(アラ、ナガ、アオ)、2拍めがラ行音だったり(アラ、フル、シラ)、ラ行狭母音だったりす

⁷ 「中(ナカ)」に弱い連濁抑制効果があるとするれば、後述するように、意味の抽象性によるものと考えられる。

【表8】 形容詞の語幹を前項とする村名の連濁率（低い順）
（合計村名数が20以上のもの）

前項要素	読み	連濁合計	非連濁合計	合計村名数	連濁率
荒	アラ	0	40	40	0.0%
永	ナガ	0	26	26	0.0%
長	ナガ	2	103	105	1.9%
古	フル	1	44	45	2.2%
青	アオ	3	49	52	5.8%
高	タカ	32	99	131	24.4%
赤	アカ	11	30	41	26.8%
深	フカ	9	17	26	34.6%
黒	クロ	38	68	106	35.8%

る（フル）。2拍めが濁音のナガも低い。これらは完全に予測可能ではないが、形容詞の語幹という連濁抑制条件に〔図1〕でまとめた連濁促進傾向や連濁抑制傾向が複合したものであるということで説明できるものと思われる。ところで、「安（ヤス）」は

形容詞の語幹とはせず、『地名用語語源辞典』で語源不確かと記載されている⁸点も考慮して、これから述べる意味の抽象性の項目で「意味不明瞭」と分類している。「安（ヤス）」を前項要素とする地名はかなり多いが、意味がはっきりしない。「安田」が「安い田」と解釈できるわけでもなさそうである。「安（ヤス）」を前項とする村名の連濁率も高く、70.3%だった点も形容詞の語幹と解釈される他の前項要素とは著しくことなっている。

さて、形容詞の語幹でなくても、「下（シモ）」や「横（ヨコ）」や「片（カタ）」や「北（キタ）」など、連濁率が20数パーセント以内に収まっており、抽象的な意味をもつ前項では、全体として、形容詞の語幹ほどの非連濁傾向までは行かないが、連濁率が多少抑えられているようである⁹。〔表9〕では、前項

【表9】 意味の抽象性・非抽象性の区分による
連濁率の違い

前項の意味の抽象性	調査前項数	連濁数	非連濁数	連濁率
抽象的意味	107	553	1,722	24.3%
非抽象的意味	160	819	1,237	39.8%
意味不明瞭	25	185	141	56.7%

要素の意味による区分を試みとして行ったもので、抽象的意味と非抽象的意味を区別して、連濁率を出している。幾分無理やり区別したところもあると思うし、

⁸ 「実例からは一つの意味・語源に特定しがたいところが感じられる。いくつかの語源による近似音の用語が「安」という好字に収斂していったものかも知れない。」（『地名用語語源辞典』、1981）

⁹ 平田（2011）では、姓の「平田」が非連濁で、「原田」が連濁する理由の説明が未解決の問題だと指摘している。城岡（2014a）では、有力地名や著名姓の読み方からの影響など、なんらかの特殊事情や偶然の結果という説明を行っているが、ここでの結果に基づくと、「平（ヒラ）」なら抽象的意味の前項、「原（ハラ）」なら非抽象的意味の前項なので、連濁傾向の差の一端は、前項の意味が担っている可能性が多少はあると思われる。

『地名用語語源辞典』などの記載が一般に多義として扱われていることを考えれば分かることであるが、客観的基準で調査対象全体を分類することは不可能であろう。当て字の場合もあるわけだし、厳密な分類にはなっていないだろうが、抽象的意味と判断したのは、形容詞の語幹のほか、時間的意味を表すもの（「春」、「秋」など）、相対的位置関係を表すもの（「横」、「下」など）、非現実的空間に関するもの（「天」、「神」など）、動詞の意味を表すもの（「折」、「落」など）、数量を表すものなどである（「三」、「八」）、（巻末の付録1の調査前項リストに抽象的意味と区分した107種の前項要素はアスタリスクを付けて区別している）。連濁率は24.3%だから、連濁抑制効果があることが分かる。逆に、非抽象的意味、つまり具体的な意味をもつ前項要素の場合は、連濁率が39.83%で弱い連濁促進効果をもっていることになる。前項に複数の意味がある場合や本来の漢字の意味では使っていない場合など、区分は絶対的ではなく、「意味不明瞭」という区分も設け、「相（アイ）」、「斎（サイ）」、「乙（オト）」、「曾根（ソネ）」などはここへ分類した。「時」も鶉の意味やまったく別の意味の語の語形が崩れ、トキになったという説もあるくらいなので、時間的意味で「抽象的意味」とはせずに、「意味不明瞭」とした。具体的な意味をもつ前項がその意味で使われていない場合などはあいまいであるが、「下」や「横」のような場合は、非抽象的意味ということはあるまいだろう。なお、抽象的意味だから連濁が抑制されるのか、具体的な意味をもっていなければ、連濁が抑制されると考えた方がよいのか、そのあたりのことは、今後、地名や固有名詞以外の連濁研究から示唆が得られる可能性を期待したい。意味不明瞭と分類したものの連濁率が高くなっているのは、「安（ヤス）」や「吉（ヨシ）」¹⁰をここに含めたため、この二つを除外すると、抽象的意味の前項要素なりにかなり低めの連濁率になる。

形容詞の語幹を含めて抽象的な意味の要素が複合語前項になるとき連濁が抑制される傾向はあるが、多くの場合、さらに、前項の2拍めにラ行音や狭母音が複合して出現する。単独ではどの程度連濁を抑制して、複合が可能な組み合わせがどれとどれで、連濁を抑制する強さがどの程度で、それは、現代まで変化していないのかというような問題は、明確に回答することはできない。しかし、現代までの傾向の変化ということでは、形容詞の語幹が前項や抽象的な意味の前項という条件は、単独条件としては、連濁抑制効果を弱めた可能性がある。明治期の「高田村」は、『地名索引』によると、連濁形：14、非連濁形：50

¹⁰ 植物の「蘆」の意味の言い換えという説明も一般に行われているし、単純に好字として使われているという説明もなされている。

で、非連濁形がはるかに多かった。ところが、現代の郵便番号簿地名では、連濁形が多くなっている¹¹。形容詞の語幹や意味の抽象性による非連濁傾向は弱まってきていることが考えられそうである。なお、ホイットニー（1889）¹²は『地名索引』と同時代に編集され、発音のゆれまで記載しているが、全国の8か所の「高田」はすべてTakataとされている。大正時代の『日本地図帖地名索引』ではタカタが9か所、タカダは7か所で、タカダの割合が増えているようだが、依然、非連濁形のタカタがややタカダを上回っている。現代でも高田地名はかなり多いので、地域を限定して、かつてタカタ村がもっとも多かった千葉県の高田で明治期と現代の連濁傾向を比較してみよう。

【明治期の千葉県内の「高田村」】『地名索引』から

タカタ	5村	上総国市原郡／上総国長柄郡／上総国武射郡／下総国東葛飾郡／下総国千葉郡
タカダ	1村	下総国海上郡

【現在の千葉県内の「高田」地名】郵便番号簿地名から

タカタ	1か所	柏市高田（タカタ）
タカダ	5か所	千葉市緑区高田町（タカダチョウ）／銚子市高田町（タカダチョウ）／茂原市高田（タカダ）／市原市高田（タカダ）／山武郡芝山町高田（タカダ）

タカタとタカダの件数が明治期と現代で逆転していて、5対1から1対5になっており、連濁傾向が大きく進んだことが確認できる。

全国に広く分布した「中島村」についても、明治期から現在までの状況を確認しておこう。明治期の中島村は、非連濁形のナカシマ（54村）が連濁形のナカジマ（26村）の2倍以上もあり、ナカシマが優勢だったが、大正期の『日本地図帖地名索引』（1925）に掲載された地名の「中島」では、ナカシマとナカジマが5対5で拮抗していて¹³、連濁形の割合が増加したことが分かる。現在の郵便番号簿では、完全に逆転している。これが全国の状況である。「中島」は島

¹¹ 全国的な証拠は出せないが、姓においても、タカダがタカタに対して優勢になってきていることが予想される。静岡大学の2015年の防災訓練時のネット上の安否確認によると、回答した教職員と学生の「高田」さんは、タカダが3人、タカタが2人だった。

¹² CiNii Booksで調べると、国内で所蔵している図書館は多くないが、複製版がでている。筆者が利用したのは、詳しい書誌情報はないが、インドのPranava Booksから出版された複製版である。

¹³ 他に、愛知県にあった中島郡がナカシマとされている。

名というよりは、河川の下流部に見られる中洲に関連して多く使われ、全国で頻度の高い地名の一つであり¹⁴、静岡県内にも多く分布している。明治期の村名では、静岡県の中島村もナカシマが5村（遠江国豊田郡、遠江国山名郡、駿河国富士郡、伊豆国君澤郡）、ナカジマが1村（駿河国駿東郡）だったが、現在の静岡県の地名では、下記に見る通り、ナカシマは完全に消失している。

【郵便番号簿から抽出した静岡県の中島】

静岡市駿河区中島（ナカジマ）	磐田市福田中島（フクデナカジマ）
浜松市中区中島（ナカジマ）／中島町（ナカジマチョウ）	磐田市竜洋中島（リュウヨウナカジマ）
三島市中島（ナカジマ）	伊豆ノ国市中島（ナカジマ）
富士宮市中島町（ナカジマチョウ）	駿東郡小山町中島（ナカジマ）
富士市中島（ナカジマ）	志太郡大井川町中島（ナカジマ）

ナカジマやタカダが現代多くなっていることは、前項のナカやタカだけの問題ではなく、後項要素としての「島」や「田」の連濁傾向が強くなったことが関係していることも考えられる。また、[図1]にまとめたようにタカやナカは2拍めがカ行清音ということで弱い連濁促進傾向が明治期の地名でもあったはずである。様々な条件の複合可能性や一つ一つの連濁抑制条件や連濁促進条件の強度というものも考えることで、連濁・非連濁の時代ごとの実態と歴史的变化について解明が進む可能性はあるだろうが、全国の地名データでも、必ずしも十分な数のデータが集まるわけではなく、確かな推定は容易ではないだろう。

2.3 複合語境界を挟んだ同一行の清音連続が連濁に与える影響

2.2では前項の条件を扱ったが、前項だけの条件ではなく、前項と後項の両方が絡んだ連濁促進・抑制条件があるようである。前項末の拍と後項先頭の拍の組み合わせが関与していて、同一行の清音連続が関与する連濁・非連濁がある。カ行とタ行の場合は、明治期の村名で同一行の清音連続だとそれを回避して、連濁しようとするようで、連濁率が高くなることが分かった。サ行では逆

¹⁴ 城岡（2009：46）では、人口順に100位以内の日本人の姓を2007年の郵便番号簿地名（町域名）でどの程度地名で使われているか探した結果を載せているが、地名として全国の100か所以上で見つかったものは、清水、中野、山田、上野、中島、原、和田、田中、中山の順に9つだった。なお、日本人の地名や姓で、明治期以降、連濁傾向が動いた可能性がある使用頻度の高い名称は、中島、吉田、高田、小川、福田、山崎、山口、大塚、中川、小島、高木ぐらゐであろう（郵便地名の頻度順）。

に清音連続が許容されやすくなる傾向が見られた。なお、連濁と関係している清音にはハ行もあるが、語中・語末のハ行音は、タヒラ（平）やカヒ（貝）やシホ（塩）などで明らかのように、発音がハ行ではなかったと思われるし、カ行、サ行、タ行に比べて数も少なく、調査項目から除外している。

【表10】 前項末の清音の区別と連濁率

2拍前項末の カ・サ・タ行清音	調査前項数	連濁数	非連濁数	連濁率
カ行清音終わり	38	304	470	39.3%
サ行清音終わり	49	336	290	53.7%
タ行清音終わり	35	139	239	36.8%

まず、2拍めが清音（カ行清音、サ行清音、タ行清音）前項の連濁率を前項の該当数を【表10】に出しておく、調査前項全体の連濁率が

33.4%（【表1】）だったわけであるから、2拍めが無声の清音で終わるこれらの前項はすべて平均以上の連濁率で、とくにサ行が54.0%で高くなっていることが分かる。2拍めの先頭に無声子音が使われるこれらの場合は、声帯が連続して稼働しておらず、声帯の稼働の障害になる声帯の「疲労」¹⁵のような要素がなく、そのことが連濁し易いことに関与していると説明できるだろう。2.2で見たように、逆に、前項に無声子音が欠如する場合は、声帯は前項の1拍めの先頭から2拍めの末尾まで連続稼働することになるが、連濁が抑えられるということは、声帯がさらに連続稼働することを抑制しているものと解釈でき、連濁率が25.0%で（【表5】）、平均よりかなり低く抑えられていた。連濁が声帯の「疲労」を起こすような連濁を抑制したためと説明できるだろう。

【表11】はカ行終わりの前項にカ行始まりの前項が続く場合の連濁率をその他の場合と対比している。後項先頭がカ行清音の場合の連濁率が58.5%で、その他の場合が35.6%だから、約23%

【表11】 カ行の同一清音行連続とその他の場合

カ行清音終わりの前項 (38種)	連濁数	非連濁数	連濁率
後項が カ行清音始まりの場合	72	51	58.5%
後項が その他の場合	232	419	35.6%

の差があり、同一清音行連続で連濁率が高くなっている。このことを実際の村名で見ておこう。「川」を後項とする調査村名全体の連濁率は15.4%と下から2番めに低かった（【表2】）。ところが、「深川村」では「深」が形容詞の語幹な

¹⁵ ここでは、声がかれたりするときに使う声帯疲労のような大袈裟な意味ではなく、声帯の連続稼働が続けば連濁が抑制され、連続稼働していなければ、声帯は稼働しやすく連濁しやすいという仮説を分かりやすくするために「疲労」という用語を使っている。

ので連濁が抑制されるはずであるが、4村：1村で連濁が多かった。一方、形容詞の語幹ほどではないが、方位で抽象的意味の前項をもつ「北川村」では連濁が多少は抑制されてもおかしくないが、1村：9村で非連濁形の割合が「深川村」に比べてはるかに多かった。「深」と「北」の差は、フカとカワでは、同一清音行連続回避の連濁傾向が強かったために、その結果、「深川村」と「北川村」の連濁割合の差がこれだけついたものと説明できると思われる。

【表12】 サ行の同一清音行連続とその他の場合

サ行清音終わりの前項 (49種)	連濁数	非連濁数	連濁率
	336	290	53.7%
後項が サ行清音始まりの場合	37	46	44.6%
後項が その他の場合	299	244	55.1%

次にサ行清音の場合が[表12]である。2.2の前項のみの音韻条件でも2拍めがサ行清音の前項が最も強い連濁促進条件になっていて、理由は分からないが、2拍めがサ行清音の前項は特殊

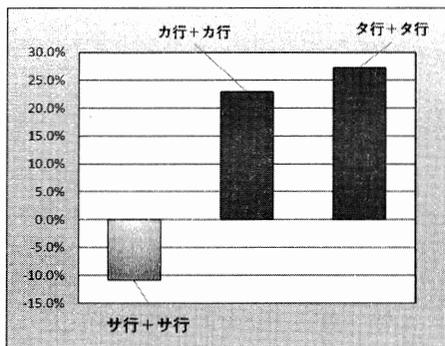
な前項になっていたが、先頭がサ行清音の後項が接続する場合も、連濁を促進する傾向がないという点で特殊な結果になっている。もともと連濁率の高かった2拍めがサ行音の前項であるが、[表12]にあるように、後項の先頭がサ行清音の方がその他の場合よりも連濁率が低く、差が約11%ある。サ行清音が同一行で連続する場合の連濁を促進しないという特殊性については、筆者の知見では、具体的な考えをまとめることができていない。

タ行について同一清音行連続についてまとめたのが、[表13]である。同一清音行の連続条件の連濁率とその他の後項と複合する場合の連濁率を比べてみると、カ行+カ行では22.9%の差があり、タ行+タ行では、27.3%でさらに差が大きくなっている。つまり、カ行+カ行では、カ行+ガ行に変えられ、タ行+タ行ではタ行+ダ行に変えられる場合が増える傾向が強いということになる。この連濁率の差は連濁促進効果と考えることができる。タ行清音終わりの2拍前項には、カ行とは異なり特殊な点もある。タ行清音以外が後項の先頭にある場合の連濁率は25.2%で、これは2拍前項全体の平均連濁率の33.4% ([表1]) よりかなり低くなっており、連濁が抑えられていることになるだろう。2.2の前項の音韻条件では、2拍めが

【表13】 タ行の同一清音行連続とその他の場合

タ行清音終わりの前項 (35種)	連濁数	非連濁数	連濁率
	139	239	36.8%
後項が タ行清音始まりの場合	84	76	52.5%
後項が その他の場合	55	163	25.2%

タ行+タ行では、27.3%でさらに差が大きくなっている。つまり、カ行+カ行では、カ行+ガ行に変えられ、タ行+タ行ではタ行+ダ行に変えられる場合が増える傾向が強いということになる。この連濁率の差は連濁促進効果と考えることができる。タ行清音終わりの2拍前項には、カ行とは異なり特殊な点もある。タ行清音以外が後項の先頭にある場合の連濁率は25.2%で、これは2拍前項全体の平均連濁率の33.4% ([表1]) よりかなり低くなっており、連濁が抑えられていることになるだろう。2.2の前項の音韻条件では、2拍めが



【図2】 同一清音行連続の促進効果と連濁抑制効果

示している。理由不明の弱い連濁抑制効果であるが、現代にかけて、このサ行の状況は解消され、現在では、タ行やカ行と同様に連濁促進傾向を強めているように思われる。明治期村名の調査では、サ行の場合だけ例外的に連濁を抑制する傾向が出ていたが、現在の郵便番号簿地名では、サ行終わりの前項にサ行始まりの後項が接続する場合も、連濁を促進する方向に方向転換したように見える。まず、明治期村名で非連濁形がとくに多かったのは、石坂村と吉崎村と蘆崎村の三つである（他にも多くの非連濁形があったが、該当する村名が1村のものが多い）。イシサカとイシザカは4：1でイシサカが優勢だったし、ヨシサキとアシサキでは非連濁形しかなく、連濁形の村名がなかった。

- ① 石坂村……イシザカ：1 ……イシサカ：4
- ② 吉崎村……ヨシザキ：0 ……ヨシサキ：6
- ③ 蘆崎村……アシザキ：0 ……アシサキ：3

郵便番号簿地名では、イシサカは少数派に変わっており、富山県に2か所と石川県と福岡県にあるだけである。一方、イシザカの方は北海道、青森県、埼玉県、新潟県、富山県、静岡県、愛知県、福岡県（2か所）、長崎県に分布しており、現代地名では優勢と劣勢が逆転して、連濁形が多くなっている。「吉崎」では、さらに急進的な変化をしてあり、『地名索引』で見つかる6村はすべて非連濁形だったが¹⁶、現代の郵便番号簿で見つかるヨシサキは能登国羽咋郡にあっ

¹⁶ 『地名索引』には対応村名はないが、ホイトニー（1889：191）では福井県あわら市吉崎の対応地名がすでにYoshizakiと連濁形で記されている。この「吉崎」は名所でもあったせいとか、『日本地図帖地名索引』（1925）にも唯一掲載されているが、ヨシサキと非連濁形になっており、明治期

た吉崎村の後継地名がヨシサキを継承しているが、他に全国の7か所に見つかる「吉崎」は連濁形のヨシザキを使っている。非連濁形しかなかった蘆崎村の場合も、郵便番号簿地名に旧字体の「蘆」を使う「蘆崎」はないので、「芦崎」で調べると、アシサキは千葉県銚子市に残るだけで、全国には他に4か所の「芦崎」があるが、連濁形のアシザキを使用している。ということで、かつて、連濁が抑制される傾向もあったサ行+サ行の複合地名も、現代では、強い連濁傾向をもつようにならなくなってきており、「～崎」の非連濁形から連濁形への変化は他にも容易に見つかるようだ。「磯崎村」は陸前国宮城郡にイソサキ村としてあっただけだが、郵便番号簿では、宮城県のほか、茨城県、三重県に見つかり、イソザキである。連濁させない場合は音韻脱落の傾向も出るのだろう¹⁷。「磯崎」をイサキと発音する地名が愛媛県八幡浜市にある（保内町磯崎ホナイチョウイサキ）。また、群馬県イセサキ（伊勢崎）市や東武鉄道の東武イセサキ線の発音がイセザキと連濁させて発音される傾向が出ているのは、サ行の清音の連続がそのまま使われる傾向が連濁へと変わってきている発音傾向の変遷と無関係ではないだろう。ネット上にもイセサキかイセザキかという点については、多くのコメントや質問が掲載されている。

同一清音行が連続する条件で、明治期には、カ行連濁やタ行連濁の連濁促進傾向が強かったといっても、連濁率は58.5%（〔表11〕）や52.5%（〔表13〕）なので、非連濁例も多数見つかるとくに非連濁形が多かった事例についてその後の音変化を追跡調査すると、連濁形への変化が観察できる。赤木村（アカキ：5、アカギ：3）、高木村（タカキ：17、タカギ：16）、中川村（ナカカワ：16、ナカガワ：15）、滝川村（タキカワ：6、タキガワ：0）、片田村（カタタ：6、カタダ：3）、北田村（キタタ：4、キタダ：2）、松田村（マツタ：5、マツダ：1）、松塚村（マツツカ：4、マツヅカ：1）、二塚（フタツカ：3、フタヅカ：0）などでは、同一清音行の連続が強い連濁促進傾向に「晒されて」いたことになるが、現代の郵便番号簿地名では、最低でも連濁形がなかった地名で連濁形が生じている。連濁形と非連濁形の数が逆転している場合も多い。「赤木」、「中川」、「松塚」では、かつて優勢だった非連濁形が現代の郵便番号簿地名から消失している。

から大正期にかけてもゆれていたことを伺わせる。

¹⁷『地名索引』によると、播磨国赤穂郡にはサカコシ（坂越）村があった。これは、ホイトニー（1889）でもSakakoshiとあり、非連濁形が確認できる。現代の後継地名は、サカゴシにはならなかったが、音韻脱落させて、兵庫県赤穂市の「坂越（サコシ）」になっている。

3. 要旨

内務省地理局は、明治維新により統一され、近代国家になった日本全国の地名などを『地名索引』(1885)にまとめているが、本稿では、これをもとに2拍前項という地名のもっとも基本的な前項要素をもつ地名複合語の連濁・非連濁を調査した。現代の地名への変遷は、可能な場合に、『地名索引』とほぼ同時期に外国人がまとめた地名資料であるホイットニー(1889)や大正期の『日本地図帖地名索引』(1925)や現代の郵便番号簿地名も調査した。

まず、これまでに先行研究で指摘されたり、検討された内容などを参考に、前項要素中の音韻が関与した連濁抑制条件と連濁促進条件を明らかにした。調査結果から明らかになった連濁抑制条件は、強いものから弱いものまで下記のものだった。

- ① 強条件 2拍めが濁音／2拍めがラ行狭母音
- ② 中条件 2拍めが引き音／2拍めがラ行音／2拍めがワ音
- ③ 弱条件 無声子音が欠如

一方、連濁を促進する音韻条件は、撥音後の字音語(漢語)は取り上げられることが多いが、他の条件が先行研究で取り上げられた例を管見では見つけることができなかった。しかし、調査結果に基づくと、下記のものに連濁促進効果があることが明らかになった。

- ① 強条件 2拍めがサ行清音
- ② 中条件 2拍めがナ行音／2拍めがマ行音
- ③ 弱条件 2拍連続無声子音／2拍めがカ行清音

前項に無声子音しか使われていなかったり、2拍めに特定の無声子音が使われている条件は、連濁による声帯の連続稼働が関連している可能性があるだろう。有声子音の関連では、マ行音とナ行音に中程度の連濁促進効果があるということとなったが、濁音やラ行音の方は、上に見たように、連濁抑制効果があった。したがって、日本語の有声子音は、連濁を抑制するものと促進するものの2群に分類されることになるだろう。

- (1) /b, d, g, z, r/……………連濁を抑制
- (2) /m, n/……………連濁を促進

さらに、本論では、意味や品詞との関連で、形容詞の語幹や前項の意味が抽象的な場合に連濁が抑制される弱い傾向があることを調査結果に基づき指摘した。「荒（アラ）」を前項とする村名に連濁するものがなかったし、「長（ナガ）」を前項とする村名で連濁するものがほとんどなかった。2拍めの濁音やラ行音に加えて、この形容詞の語幹という特徴が加わったことがその強い非連濁傾向の説明になるものと思われる。

また、複合語の境界の前後の拍に同一行の清音が使われる場合があり、カ行とタ行に強い連濁促進傾向があることを確認した。サ行については、明治期の村名調査では連濁を促進する傾向があいまいだったが、現在までに連濁を促進する傾向が明瞭になってきたことを実例をあげて指摘した。

本稿の調査で不明なまま終わったことも指摘しておくべきだろう。合計村名数が20以上あった前項要素でもっとも連濁率の高かった「池（イケ）」は、2拍めがカ行清音で、非抽象的意味であり、本稿で指摘した種々の連濁抑制条件をもっていない。したがって、高い連濁率はある程度説明可能だ。しかし、42か村と連濁形の多かった「池田村」にしても非連濁形が5か村存在した。これはどのように説明すべきなのだろうか。また、地名由来の多い日本人の姓の連濁・非連濁と明治期の村名の連濁・非連濁にも不可解な点がある。『日本人の苗字 表音編・表記編』（生命保険加入者などに基づく実証的データ）によると、「池田」にはイケダだけでなく、イケタの発音もある。これは明治期の村名の連濁・非連濁から理解できる。しかし、「徳田」の場合は、8か村あった「徳田村」は連濁形のみだったのに、苗字の発音にはトクダとトクタの両方がある。明治期以前の村名について発音を確認することはほとんど不可能だが、トクダ村も明治期以前にトクタ村だった可能性があるということなのだろうか。

日本人の姓の連濁・非連濁を厳密に追求できるような資料は現時点で存在しないが、地名の連濁・非連濁が変化して、姓の発音も変化したというような容易に理解可能な変化や、沖縄県の「新垣」のように沖縄で例外的にアラカキと発音される村名¹⁸に基づく姓が、沖縄県以外でアラガキと発音されるようになるというような単純な音韻対応以外にも、二つの固有名詞のあいだになんらかの傾向の違いなどがあるのだろうか。将来、この方面の傾向と規則性が明らかにされることを期待したい。

なお、個々の地名の変遷を徹底的に調査したわけでも、現代の地名の連濁・

¹⁸ 「地名索引」の琉球の新垣村の発音表記はアラカキでもなく、アラカチである。現代の地名の読みとしての「新垣（アラカキ）」の特殊性については注の5を参照されたい。

非連濁の全体的な傾向を大規模調査したわけでもなく、一部のサンプルの調査にとどめている。村名調査にあたっては、ていねいにやったつもりであるが、意図せざる間違いが混入している可能性は皆無ではない。そもそも『地名索引』自体にもデータ収集ミスや編集ミスなどもあるだろうから、完全というわけにはいかない。ご容赦を願いたい。

【参考文献】

- 石井博 (1997)、「〈荒川〉の〈川〉は何故連濁しないのか」『語研フォーラム』7、早稲田大学語学教育研究所、99-108。
- 小川琢治 (1923)、『市町村大字読方名彙』、成象堂。
- 小川琢治 (1925)、『日本地図帖地名索引』、成象堂。
- 楠原佑介・溝手理太郎 (1981)、『地名用語語源辞典』、東京堂。
- 城岡啓二 (2009)、「静岡県の地名と姓一名前の日本語を探検する一」『聞いてびっくり！日本語ゼミナール』、静岡大学人文学部、41-63。
- 城岡啓二 (2014a)、「明治時代以降の『〜川』の連濁と非連濁について」、『人文論集』64号の1・2、静岡大学人文社会科学部、159-185。
- 城岡啓二 (2014b)、「オ・コ (小) とオー (大) が地名の連濁に与える影響について一明治期村名とその後の音変化から連濁・非連濁の傾向と規則性を読み取る一」、『人文論集』65号の1、静岡大学人文社会科学部、27-62。
- 城岡啓二 (2015)、「複合語前項の長さの連濁への関与について一固有名詞、一般語彙、和語、漢語一」、『人文論集』66号の1、静岡大学人文社会科学部、137-167。
- 城岡啓二 (2017)、「3拍前項をもつ明治期村名の連濁を抑制する音韻条件について一濁音、鼻音、ラ行音、狭母音、無声子音音素数との関連一」、『人文論集』68号の1、静岡大学人文社会科学部、83-113。
- 内務省地理局編 (1881)、『郡区町村一覽』。
- 内務省地理局編 (1885)、『地名索引』。
- 日本ユニバック編 (1978)、『日本の苗字 表音編、表記編』、日本経済新聞社。
- 平田淳子 (2011)、「連濁試論 (その2)」、『神戸海星女子学院大学研究紀要』50、89-93。
- ホイットニー、ダブルユー、エヌ (1889)、A Concise Dictionary of the Principal Roads, Chief Towns and Villages of Japan, with Populations, Post Offices etc.

丸善商社書店。

【付録1】調査した292種の前項要素

- 「抽象的意味」と判断したものには*を後置し、「意味不明瞭」としたものには?を後置した。五十音順に並べ、1字のものを先に出し、2字のものを最後にまとめた。

相(アイ)?、青(アオ)*、赤(アカ)*、秋(アキ)*、浅(アサ)*、朝(アサ)*、麻(アサ)、足(アシ)、蘆(アシ)、熱(アツ)*、厚(アツ)*、跡(アト)?、天(アマ)*、雨(アメ)、荒(アラ)*、有(アリ)*、粟(アワ)、飯(イー)?、家(イエ)、生(イク)*、池(イケ)、石(イシ)、磯(イツ)、板(イタ)、市(イチ)、出(イデ)*、糸(イト)、稻(イナ)、犬(イヌ)、今(イマ)*、芋(イモ)、岩(イワ)、植(ウエ)*、上(ウエ)*、魚(ウオ)、浮(ウキ)*、請(ウケ)*、牛(ウシ)、薄(ウス)*、歌(ウタ)?、内(ウチ)*、打(ウチ)*、姥(ウバ)、梅(ウメ)、浦(ウラ)、上(ウワ)*、枝(エダ)、老(オイ)*、大(オー)*、太(オー)*、岡(オカ)、沖(オキ)*、荻(オギ)、奥(オク)*、押(オシ)*、遅(オソ)*、落(オチ)*、乙(オト)?、面(オモ)?、折(オリ)*、貝(カイ)、海(カイ)、柿(カキ)、掛(カケ)*、笠(カサ)、風(カザ)、檜(カシ)、梶(カジ)、粕(カス)、片(カタ)*、堅(カタ)*、門(カド)、金(カナ)、金(カネ)、樺(カバ)、鎌(カマ)、上(カミ)*、神(カミ)*、龜(カメ)、鴨(カモ)、萱(カヤ)、唐(カラ)*、狩(カリ)*、刈(カリ)*、苧(カリ)*、川(カワ)、河(カワ)、菊(キク)、岸(キシ)、北(キタ)*、君(キミ)、清(キヨ)*、桐(キリ)、切(キリ)*、草(クサ)、串(クシ)、櫛(クシ)、楠(クス)、葛(クズ)、口(クチ)、國(クニ)、窪(クボ)、熊(クマ)、倉(クラ)、鞍(クラ)、藏(クラ)、栗(クリ)、黒(クロ)*、桑(クワ)、越(コシ)*、駒(コマ)、米(コメ)、薦(コモ)?、斎(サイ)?、坂(サカ)、崎(サキ)、鷺(サギ)、笹(ササ)、指(サシ)*、定(サダ)?、里(サト)、眞(サナ)?、實(サネ)?、寒(サム)*、猿(サル)、澤(サワ)、椎(シー)、鹽(シオ)、鹿(シカ)、繁(シゲ)*、宍(シシ)、下(シタ)*、篠(シノ)、柴(シバ)、芝(シバ)、渋(シブ)*、島(シマ)、下(シモ)*、白(シラ)*、末(スエ)*、菅(スガ)、杉(スギ)、助(スケ)*、菅(スゲ)、鈴(スズ)、砂(スナ)、住(スミ)*、關(セキ)、芹(セリ)、添(ソエ)*、側(ソ

バ) *、高(タカ) *、瀧(タキ)、竹(タケ)、蓼(タデ)、棚(タナ)、谷(タニ)、種(タネ)、玉(タマ)、樽(タル)、近(チカ) *、塚(ツカ)、月(ツキ)、次(ツギ) *、土(ツチ)、角(ツノ)、坪(ツボ)、鶴(ツル)、寺(テラ)、遠(トー) *、時(トキ) ?、徳(トク) *、構(トチ)、殿(トノ)、富(トミ) *、友(トモ) *、豊(トヨ) *、鳥(トリ)、苗(ナエ)、直(ナオ) *、中(ナカ) *、長(ナガ) *、永(ナガ) *、梨(ナシ)、鍋(ナベ)、並(ナミ) *、成(ナリ) *、成(ナル) *、新(ニー) *、苦(ニガ) *、西(ニシ) *、萑(ニラ)、庭(ニワ)、糠(ヌカ)、沼(ヌマ)、猫(ネコ)、延(ノブ) *、灰(ハイ)、拜(ハイ) ?、萩(ハギ)、箱(ハコ)、橋(ハシ)、髯(ハシ)、蓮(ハス)、畑(ハタ)、幡(ハタ) ?、初(ハツ) *、花(ハナ)、羽(ハネ)、濱(ハマ)、早(ハヤ) *、原(ハラ)、針(ハリ)、春(ハル) *、稗(ヒエ)、引(ヒキ) *、疋(ヒキ) *、久(ヒサ) *、菱(ヒシ) *、姫(ヒメ)、平(ヒラ) *、蛭(ヒル)、廣(ヒロ) *、深(フカ) *、房(フサ)、伏(フシ) *、藤(フジ)、伏(フセ) *、二(フタ) *、船(フナ)、古(フル) *、蛇(ヘビ)、銚(ホコ)、星(ホシ)、細(ホソ) *、程(ホド) ?、洞(ホラ)、堀(ホリ)、舞(マイ) *、前(マエ) *、曲(マガ) *、牧(マキ)、横(マキ)、孫(マゴ)、政(マサ) ?、正(マサ) ?、増(マス) *、升(マス)、枡(マス)、町(マチ)、松(マツ)、豆(マメ)、丸(マル) *、右(ミギ) *、水(ミズ)、道(ミチ)、三(ミツ) *、蓑(ミノ)、宮(ミヤ)、麥(ムギ)、虫(ムシ)、村(ムラ)、室(ムロ)、餅(モチ)、持(モチ)、元(モト) *、本(モト) *、森(モリ)、盛(モリ) *、諸(モロ) *、安(ヤス) ?、八(ヤツ) *、藪(ヤブ)、山(ヤマ)、横(ヨコ) *、吉(ヨシ) ?、芳(ヨシ) ?、良(ヨシ) ?、米(ヨネ)、若(ワカ) *、脇(ワキ) *、鷲(ワシ)、綿(ワタ)、渡(ワタ) ?、伊勢(イセ)、江曾(エソ) ?、久保(クボ)、獅子(シシ)、曾根(ソネ) ?、千代(チヨ) *、三津(ミツ) ?、八重(ヤエ) *。

【付録2】20村以上の使用例のあった59種の前項要素の連濁率など(13種の後項要素全体に対する合計で、連濁率の低い順で同順の場合は五十音順)

● 漢字表記/カナ表記/連濁数/非連濁数/合計村名数/連濁率

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| (1) 荒/アラ/0/40/40/0.0% | (4) 永/ナガ/0/26/26/0.0% |
| (2) 太/オー/0/52/52/0.0% | (5) 長/ナガ/2/103/105/1.9% |
| (3) 久保/クボ/0/21/21/0.0% | (6) 古/フル/1/44/45/2.2% |

- (7) 白/シラ/1/31/32/3.1% (34) 中/ナカ/67/110/177/37.9%
- (8) 成/ナリ/1/20/21/4.8% (35) 澤/サワ/11/18/29/37.9%
- (9) 青/アオ/3/49/52/5.8% (36) 熊/クマ/8/12/20/40.0%
- (10) 藤/フジ/3/46/49/6.1% (37) 西/ニシ/40/56/96/41.7%
- (11) 下/シモ/3/39/42/7.1% (38) 豊/トヨ/21/28/49/42.9%
- (12) 大/オー/21/255/276/7.6% (39) 船/フナ/19/23/42/45.2%
- (13) 横/ヨコ/4/42/46/8.7% (40) 北/キタ/31/37/68/45.6%
- (14) 平/ヒラ/10/87/97/10.3% (41) 前/マエ/22/21/43/51.2%
- (15) 廣/ヒロ/3/25/28/10.7% (42) 石/イシ/54/50/104/51.9%
- (16) 岩/イワ/8/58/66/12.1% (43) 米/ヨネ/11/9/21/52.4%
- (17) 松/マツ/7/47/54/13.0% (44) 濱/ハマ/14/11/25/56.0%
- (18) 杉/スギ/3/19/22/13.6% (45) 今/イマ/23/18/41/56.1%
- (19) 片/カタ/4/17/21/19.0% (46) 寺/テラ/37/28/65/56.9%
- (20) 鹽/シオ/8/31/39/20.5% (47) 牛/ウシ/12/9/21/57.1%
- (21) 川/カワ/10/38/48/20.8% (48) 原/ハラ/18/13/31/58.1%
- (22) 相/アイ/8/26/34/23.5% (49) 山/ヤマ/57/41/98/58.2%
- (23) 浦/ウラ/6/19/25/24.0% (50) 内/ウチ/16/10/26/61.5%
- (24) 玉/タマ/6/19/25/24.0% (51) 稻/イナ/15/9/24/62.5%
- (25) 高/タカ/32/99/131/24.4% (52) 梅/ウメ/15/9/24/62.5%
- (26) 坂/サカ/9/25/34/26.5% (53) 島/シマ/29/17/46/63.0%
- (27) 赤/アカ/11/30/41/26.8% (54) 飯/イー/49/26/77/63.6%
- (28) 市/イチ/7/16/23/30.4% (55) 吉/ヨシ/83/41/124/66.9%
- (29) 宮/ミヤ/21/45/66/31.8% (56) 安/ヤス/26/9/37/70.3%
- (30) 富/トミ/16/31/47/34.0% (57) 岡/オカ/34/14/48/70.8%
- (31) 土/ツチ/9/17/26/34.6% (58) 鎌/カマ/15/5/20/75.0%
- (32) 深/フカ/9/17/26/34.6% (59) 池/イケ/46/8/54/85.2%
- (33) 黒/クロ/38/68/106/35.8%